No. 143

ティーブレイク

Tea Break

déjà vu

会員　若林　　拡

平成23年3月11日の東日本大地震，三陸海岸線から都市部に至る巨大地震による破壊と，その30分後に襲った巨大津波によって一掃された広大な村・町の廃墟をテレビが映し出したとき，一瞬,「この光景は子供のときに見た！」と遠い記憶が蘇った。

66年前，1日違いの昭和20年3月10日の未明，春まだ浅く，寒さがぶり返した日に，上野から浅草・深川にかけて下町を襲ったアメリカ空軍B29の大編隊による空襲で，木と紙で作られた下町の家屋を効率よく，黄燐や油脂が飛び散って木や紙や人間に付着した全てを燃え尽すよう設計された焼夷弾（今のナパーム弾の原型）がばら撒かれ，何万・何千の人間ともども焼き尽くされた町を，上野駅から見た時，遮る建物が無くなり，隅田川対岸の向島のアサヒビール工場が丸見えであった。上野の山から東京湾が見えたそうな。

人間と共に焼き尽くされた町には，僅かにコンクリート作りだったが完全に焼け焦げた小学校が点在し，無数の黒焦げの死体と焼け残った瓦礫と焼けトタンと茶碗の陶器だけが残った。日本国中が戦争に巻き込まれていたので，この光景を見るものは僅かに生き残った地域の住民だけで，もちろん中継も無く，全ての被害情報は軍事機密なので同じ日本の中でも知らされず，原爆投下による被害と同じく人の噂だけが僅かに広まったに過ぎなかった。

驚いたことに，空襲の翌日，焼け焦げた無数の死体は，ガソリンが無い筈にもかかわらず，何処からか集まった多数のトラックが，遺体の身元確認の努力もせずに収集し，運び去った。

焼け出された人々は焼けトタン以外に，残った防空壕の穴のほか雨風を凌ぐ場所も無く，食べ物も無く，行政の救援も無く，1週間や10日どころか1年以上も放って置かれた。僅かに生き残った何百の下町の住民は，戦争で殺されたのではなく，雨風を凌げず，飢餓と感冒と感染症で死んで行った。

親を失った幼い子供たちは，唯一雨風を凌げる上野駅の地下道に集まり，新聞紙にくるまって寝ていた。行政はこの子達を非情にも浮浪児と称していたことを思い出す。今と違って日本中が人の面倒を見る余裕が無かったから，東日本の罹災した子供達に比べてこれも致し方無い事だったか？

現代は，日本国民の大多数が安全な場所から，広大な災害の場所を，テレビの実況放送で観察し，食べ物が無く，寒さを凌ぐに十分な燃料が無い公民館に避難した被災者を，安全な劇場の座席で見る観客のように見ている。

戦時と同じ奇妙なことが現代でも起った。原子力発電所の放射能を帯びた土砂，スクラップから放射性粉塵を飛散させないように水溶き樹脂の凝固剤を散布するとか，破壊された建物の残骸が帯びた放射線を遮蔽する粉末に樹脂を混ぜ合わせた特殊シートで瓦礫をラッピングする提案が政府内で真剣に検討されている報道を聞くと，戦時中，焼夷弾（今のナパーム弾の原型）の破裂により飛び散った，燃える黄燐，油脂などを人間や建物から叩き落すため，縄を束ねたハタキを水に浸して叩き落す事が唯一有効手段であると，政府が大真面目に推奨していた事を思い出す。

タイトルの「déjà vu」とは「初めての経験なのに，経験した感じがする記憶の錯誤（paramnesia の一種）」か「あることをしばしば経験したという感じ，帰視感」も，実は前に実景をみたか又は写真，絵画を見て強い印象を

受けて潜在意識に残り，忘れていた光景かもしれない。本当は前に見たけれど忘れていた光景が，突然，脳裏に鮮明に蘇るものを「déjà vu」というのではないか。

私の弟がハンブルグの総領事になる前，ミュンヘン総領事館に勤務していた25年前の1986年4月26日，ソ連のチェルノブイリ原発事故が発生した。翌日の27日，スウェーデンで異常に高い放射能が検出されて，スウェーデン原発は自分のところの事故かと思って大慌で調査したところ，放射能の性格がスウェーデンのものとは違うことが分かって，核戦争の勃発？…と思ったそうだ。

チェルノブイリはスウェーデンにとって偏西風の吹く方向とは逆の位置にあり，しかも1,500kmも離れています。ところが，その放射能を含んだ大気が，何と1,500kmも南下して，南ドイツ，スイス，オーストリアに滞留して大騒ぎになったそうだ。

弟は毎日のようにバイエルン州環境省などから情報を入手して，在留企業，日本人会，日本語補習校，在留邦人宛てに緊急回章を流していたそうだ。

当時の状況

4月26日　チェルノブイリ原発事故発生。

27日　スウェーデンで異常な数値の放射能を検出

28日　ソ連政府がチェルノブイリ原発事故を認める

5月1日　ドイツの大気中放射能が通常の15～20倍に急上昇

3日　ドイツ連邦政府は緊急措置として，500ベクレル/1リットルを超える未加工牛乳及び250ベクレル/1キログラムを越える生鮮野菜，生鮮果実の販売禁止と農家に対する補償金支払いを決定。

6日　南ドイツで大気中の放射能はさらに上昇して通常の40倍。牛乳やホウレンソウなどの葉っぱの広がっている野菜で2,000ベクレル/1キログラム，土壌の放射能は12,000ベクレルに急上昇

弟はドイツ政府の素早い対応には驚かされたそうだ。

今度の壊滅的な被害を受けた3月11日から3月31日の20日間は戦後の数年間に比べて果たして長いか短いか，何ともいえない。僅か20日間のうちに，道路，電車，空路，水路などの交通手段が改善し，水道，電気，ガスなどのインフラが部分的にも改善され，曲がりなり避難場所があり，着るものも，食べ物も，十分ではないが急速に供給され始めたのは，戦後の数年間の日本に比べて，日本の約3分の2の地域が被害を受けていないので，被災地のインフラさえ回復すれば，たとえ政治が不在でも，復興は急速に行われるものと期待される。

殆ど全ての外国を敵に回して戦った日本政府が機能しなくなり，民間が完全に疲弊した戦災後に比べれば，現在の被災民に対する活力のある民間と今回は躊躇無く受け入れた外国の救援は，決して遅くは無く，戦争の後を思い起こせば，賞賛に値する早さであると言っても良い。

地震，津波による災害の復興は民間活力で時間の問題だが，戦争の災害時にも無かった原発の放射能漏れは，長期に亘って日本の存続すらを危うくするものである。責められるべきは何事も想定外を免罪符として主張する政府と東電である。

この国難に、弁理士出身の菅総理大臣が政府内で強いリーダーシップを発揮し，後世に残る業績を挙げて貰いたいと願うのは我々同業の弁理士だけであろうか？